

## 『宋史河渠志索引』

佐伯 富編

西暦九六〇年に趙匡胤が擁立されて宋の太祖となつてより、都合十八主が支配した約三百三十年間の王朝を宋という。宋史とは史記・漢書以来の旧例にならない、次の元王朝が前朝である宋の正史を四九六巻に集大成したものである。二十四乃至二十五を数える歴代諸正史の中でもっとも大部かつ難解というのが専家のものならばの定評である。しかも、いやしくも中国学に携わるものとしては否応なく手にしなければならぬ要典であるところから、從来、利用者の苦悶しているところである。現今、東洋史学界の関心事の一は宋代史の徹底検討に注がれていることは周知のごとくである。この分野の究明こそが十全なる中国史解釈への鍵を握っているからである。

現本学の佐伯富教授はその貴重なる推進者の御一人である。本書のはしがきに、「宋代以後になると独裁政治の発達、それに伴なう財政経済政策の実施ならびに庶民の勃興による経済社会の發展や、その複雑化等から、官制・制度・法律など益々複雑になり、それに従つて特殊な用語が多數現われて来た。ところがそれらの制度や用語については、在來の辞典・字書には掲載されていないものが多。勢いそれを解明しようとすれば、自らそれらの制度や用語例を多數蒐集して帰納的に解明するより外に方法がない。それにはたとい不完全であつても宋史の諸志の索引を作るのが一

つの方法である」と述べ、本書の意図を要約している。なお教授は本書の上梓に先だって、既に『宋史職官志索引』（一九六三生書局）・『宋史兵志索引』（一九七八華世出版社）の三書を公刊されている。いずれも昭和二十五年から二十五年間に亘つて行われた京都大学での南宋李焘の『統資治通鑑長編』の演習講読を録として、教授がその必要を痛感されて手がけられたのがはじまりで、それぞれ綿密な増補ののち、公刊されたものである。不朽の仕事といわねばならぬと共に、学に志すものとして一つの心すべき範を示唆していることを見逃してはならないであろう。すなわち地道な作業を欠いた研究への戒である。

（安藤智信）